

## ヨブ記の現代的意義—新弁神論への試論として—(1)問題設定編

伊藤 淳

### 序

本稿では、17世紀の哲学者ライプニッツの造語になる弁神論<sup>1</sup>に新しい照明を当てて、現代世界において多くの信仰者や精神的な修行者にとっての“躓きの石”となっている「義人の苦悩」の問題に取り組むが、まずは、この問題における宗教的、哲学的、文学的に最高の古典（カノン）である旧約聖書のヨブ記の考察から深めていく。

何ゆえに、ヨブ記か、ということであるが、それは、私たちの人生問題上最大の意義を有する、もっとも純化され、凝縮された形で結晶した弁神論（神義論）であり、人類普遍の哲学的な人間肯定論であり、世界文学最高峰の人間幸福論と思われるからである。

特定の学問的な立場に立たず、特定の信仰を持たない人でも、「途中、紆余曲折はあっても、最終的には、善人が報われ、悪人が滅びる」という仏教でいう善因善果、悪因悪果の思想、つまり因果応報思想への漠とした期待感を持っている人は数多いだろう。それは、決して大学の講壇や宗教家の説法壇の中だけではなく、ごく自然な日常的な感覚、コモン・センスにおいても、人口に膾炙した考え方である。

逆に、絵に描いたような品行方正な善人が、不幸のどん底に呻吟し、極悪非道のエゴイストが、この世的な成功を収めて、極楽三昧な生活を享受しているさまを見れば、誰しも「神も仏もいるものか」と天を呪いたくなることも、人情の常として十分に理解しうる。

しかし、逆に言えば、「神や仏が存在するならば、そのような非道は通らないはず」という神仏の存在とその因果応報に即した公平な正義への痛切な期待感とがあるからこそ、そうした鬱憤や呪詛が抑えられなくなるのだとも言えよう。

もしも、初めから公平な裁定者たる神仏の存在など全く信じなかったら、過酷な状況に対して、自分の不運をかこつことはあったとしても、それ以上天を恨むような神学的、形而上学的な不平不満を吐露することはありえない。

このように、この世を誠実に生き、かつなんらかの信心をもった方であれば、悲惨で理不尽な現実に接したときに、「神がいるのに、なぜ善人が苦しみ、悪人が栄えるか」という疑念が必然的に生まれてこざるをえない。その問いに答える理論的な土俵のことを「弁神論」と呼ぶが、それは、広義の「義人ヨブの苦悩」問題と言い換えることもできるだろう。

次に、なぜこの問題設定が現代の精神風土において最重要の案件であり、この問題の解決が、新しい宗教・哲学・文学的地平、未来的な地平を開く、必要不可欠な要件であるかについて一考しておこう。

確かに、ヨブ記に象徴される問題は、いつの時代においても、またいかなる文化、地域

<sup>1</sup> 「弁神論」(Essai de théodicée) は、ギリシャ語の「神」(theos) と正義 (dikē) を融合したライプニッツ独自の造語である。「弁神論」という言葉で、彼が企図して課題は、「道徳的にも完全で、全知全能の権能をもたれた神がおられるのに、なぜ、この世界に悪や悲惨があるのか」という非難に対して、創造主たる神の正義を弁護することである。『ライプニッツ著作集 宗教哲学 弁神論(上)(下)』(工作舎、1990-91) 参照

においても通用する人類普遍の課題であると言ってもよいが、とりわけ現代においては、この問題は、死活的な重要性を有しているだろう。

現代における人間の苦悩や悪は、時に、もはや近代的合理的意識や通常の道徳的な良識で納得できる範囲をはるかに超えており、ユダヤ人大虐殺で知られるナチスの蛮行、国家自体が巨大な収容所になっているような北朝鮮の民衆の悲惨、中国におけるチベットやウイグルなどの少数民族に対する冷酷無比な人権蹂躪について思いをひそめるときに、どうしても「神がいるなら、なぜ、このような理不尽な惨状を放置しておかれるのか」という言葉を封じ込めることはできないだろうからだ。

全体主義国家における収容所体験は、むろん善悪などまるで意味をなさないような、非人情的な暴威であり、そこに宗教の基本的な前提である天意や神の摂理のようなものを読みとることは至難の業であり、時にあえてそうすれば、不謹慎とのそしりを免れないこともあるだろう。

現代の国際情勢を見渡しても、そこにあるのは、国家同士の利害のぶつかり合い、権謀術数うずまく覇権闘争があるだけで、そこにライプニッツが夢見たような全知全能の神が続べる調和的な最善的世界像を見ることは極めて困難である。現代においてそのような理想的世界観を安易に語ると、現実世界の過酷さを知らない、あまりに楽観的な夢想に見られてしまいかねない。

逆に言えば、現代において、なぜ善人も含めた悲惨があるのかという問いにきっちりと答えることができるのならば、それは新しい宗教、哲学、文学的な地平を開くことになるであろう。

## 1 ヨブ記の考察方法

以下、本題に入る前に、ヨブ記の考察方法について一言触れておきたい。ヨブ記は、上記のように哲学書や文学書としても様々な読解の可能性を許すものであるが、旧約聖書というユダヤ教<sup>2</sup>とキリスト教の聖典の一卷として収録されているものである以上、やはり第一義的には宗教書とみなすべきであろう。一切の宗教意識なく、単に、哲学書や文学書としてのみ研究しても、それはヨブ記の著者や聖書の編纂者が当初において想定した意図とは大幅に食い違ってしまうに違いない。

無論、どのような文献も、それが書かれた時代の条件や本来の意図を外して独自に換骨奪胎して読み込む自由、いわば「誤読の自由」というものもあるだろうが、それはあくまで二次的な解釈であって、本来の正統的な読解というものがあって、その正統的な解釈、いわば「直球」解釈を踏まえて、そこからの差異を弁えてこそ、いわゆる「脱構築」的な「変化球」的解釈の新味も妙味もまた理解できるのである。

しかし、正統的解釈といっても、同じヨブ記を元本にしても、ユダヤ教徒の聖書学とキリスト教の解釈は、根本的に違っているだろうし、キリスト教においても、旧教、新教、

<sup>2</sup> ユダヤ教においては、無論「旧約聖書」という名称は使われず、「聖書」とのみ命名されている。

その他の宗派間で解釈上の異同が生じるのは言うまでもないことである。

聖書が聖典である所以は、理想的な建前としては、「人間の恣意によってではなく、神よりあるいは天上界の天使などの高級諸霊よりの啓示によって書かれた」という前提に立っているわけであるが、現実には、その啓示を受け止め、「解釈」する段階で、地上の解釈者の恣意や独自の見解、時代的な偏見が入ることは絶対に免れない。

特に価値観の多様性を至上命題とする現代においては、自らの解釈を聖なる啓示として絶対視することは許されない。そこで、ヨブ記を深く読み込むためには、各種の宗教間、宗派の違いを超えた普遍的宗教心の立場、言い換えれば宗教性そのものを哲学する普遍的な宗教哲学的なスタンスに立たねばならないだろう。

最後に、また多くの論者が指摘する通り、ヨブ記は、世界文学の最高峰とされている以上、ヨブ記の真価を味読するためには、宗教的、哲学的な探究するのみならず、文学的考察も書かせない。

文学的な考察ということは、つまり「何が書かれているか」という真理内容だけではなく、「いかに書かれているか」という文体やスタイル、構成（プロット）の問題も深く考慮されなければならないということである。

たとえば、単純に宗教哲学的研究に徹して、真理内容だけに限って言えば、ヨブ記の三友の“お説教”は、単純に「因果応報の思想に基づいて、無実のヨブを不当に裁いた」と要約すればいいだろう。しかし、ヨブの苦悩を耐えがたくしているのは、その内容の不当性にのみならず無条件の共感をもって接してくれる友人の偏狭、冷徹で、独善的な口吻、頑なさ、同じ論法の執拗な繰り返しなど、その言い回し、つまり文学的な要素なのである。

## 2 ヨブ記の聖書的な位置づけ

まず、『ヨブ記』の旧約聖書における位置づけは、大きな三分類として、歴史書と諸書（ヨブ記、詩編、箴言、伝道の書、雅歌）、預言書の三分類の内の諸書の第一をなすものである。「ヨブ記」のみを切り離して論じる場合でも、この旧約における位置づけは、決して軽視してはならない。歴史書は、ひろくユダヤ民族の運命と神との関係を扱うものであり、預言書も、預言者を通じて、神が民族全体に対して啓示を降ろし、そこに神とイスラエルの民族とのダイナミックな関係が展開するのであるが、この諸書と言われる一連の文書は<sup>3</sup>、きわめて「個人的な信仰」、神と個人の魂とのあり方を掘り下げており、中でも、その劈頭を飾るヨブ記は、世界文学上も屈指の名作とみなされ、その後の文化史において圧倒的な影響を与えている<sup>4</sup>。

それは、ヨブ記が、広くユダヤーイスラエル歴史における一民族の問題を扱うよりも、まずは一個の個人としての心霊の問題を深く掘り下げることで、超地域的、超時代的な普

<sup>3</sup> 内村鑑三は、この五書を「心霊的な教訓」の書と呼んでいる。『ヨブ記講演』（岩波書店、2014年）p.8

<sup>4</sup> たとえば、ヨブ記は、ゲーテの『ファウスト』、ミルトンの『失樂園』、ライプニッツ『弁神論』、カントの宗教哲学、キルケゴール『反復』、ウィリアム・ブレイクの挿絵などヨーロッパに主要な文学思想に深甚な影響を与えている。

遍性を有するようになったことは想像に難くない<sup>5</sup>。

つまり、ヨブ記は、イスラエル固有の歴史を超えて、広く神を求める信仰者の根本問題として、そして本稿劈頭に述べたように、「善人がなぜ苦悩し、悪人が栄えるのか」といった現代においても最重要の宗教倫理的な問題として、ユダヤ、キリスト教徒ならずとも、深い関心を寄せずにはいられない普遍性を持っているのである。

以下、ヨブ記の基本設定&構成を見ておこう。

(1) 序曲：まず、第一章において、ヨブが、完全無欠の義人であり、信仰者であることが称揚される。次に、天上の第一回の神とサタンとの対話がなされる。それは、神がその敵対者に「わが僕ヨブを見たか。あのような奴は地上にはいない。まったくかつ直く、神を畏れ、悪に遠ざかっておる」(1章8)<sup>6</sup>と誇らしげに言うと、サタンは、「ヨブといえども、理由なしに神を畏れたりするものですか」(1章9)と挑発する。

要するに、ヨブが信仰篤く、神を畏れるのは、決して純粋な信仰心ゆえのことではなく、神が、彼にありとあらゆる恩恵を与えているからであり、もしもそのような恩恵を取り去ってみれば、ヨブと言えども信仰を捨てるだろうというのである。「あなたの手を伸ばして、彼の持ち物にふれてごらんください。あなたの顔に向かって呪わないではすみませぬまい」(第1章11)と毒づくのである。

神は、そのサタンからの挑戦を受けて、ヨブを悪魔の自由にさせる、その結果、彼にはありとあらゆる悲惨な運命が襲ってくる。人災・天災の両方によって、彼の持ち物をすべて奪われ、10人の息子息女も死に至らしめられる。それでも、ヨブは、志操堅固にして不屈の信仰で耐えきって、神を称えるのである。「裸で私は母の胎を出た、裸で私はかしこに帰ろう。ヤハウエ与え、ヤハウエ取りたもう。ヤハウエの名は褒むべきかな。」(第1章21-22)これだけでも常人には及びもつかない見上げた信仰であり、サタンからの挑戦に神は見事に打ち勝ったことになる。

第2章、当然、神は、「お前がそそのかして、理由もないのに彼を滅ぼそうとして、彼は以前かたく己をまっとうしておる」(第2章3)と勝ち誇るのだが、サタンは、なおも食い下がり、ヨブがそのような平気でいられるのは、試練がまだ彼の身体にまで及んでいないからであり、「あなたの手をのばして、彼の骨と肉にふれてごらんください。彼があなたの顔に向かって呪わないではすみませぬまい(第2章5)」と言い放つ。ここまででヨブ記の基本設定は完成する。

(2) 本曲：後は、ヨブの嘆き、三人の友人たちのヨブをたしなめる説教とヨブの反論(4章-31章)、さらには、青年エリフが現れて、ヨブと三友に対する仲裁的説教がなされる。

<sup>5</sup> 内村は、本書の冒頭で「ウツという地にヨブと名くる人あり」という一句が挙げられていることに着目し、このウツがパレスチナにない事実を強調して、その意味するところが、「イスラエルは、神の選民たりと言えども、神を求めるの気持ちはイスラエルの独占物ではない。人は各個人直接に神を求めるを得、神は各個人の心霊にその姿を表わし給う。—中略—そは実に個人的なるがゆえにまた普遍である」としている。前掲書 p.9-p.10

<sup>6</sup> 以下、ヨブ記からの引用は、すべて原則『ヨブ記』(関根正雄訳、岩波書店、1979)による。ただし現代的表記になじまない文章は、適宜修正したところもある。

最後に神が降臨し、神威を顕現して、ヨブは、己の過ちを謝罪する。(32章—42章1—6)

(3) 終曲：神の許しが得られ、三友に対すとりなしの祈りがなされ、ヨブの失われた名誉が回復され、最終的には以前に倍する、至福の余生が与えられるという大団圓に終結する。(42章7—17)

### 3 ヨブ記の基本構成の意味するもの

結局、このシンプル極まる構成をさらに要約するならば、ヨブ記は、神とサタンの間での挑戦と応戦を中心軸に据え、その時代において考えられる限り最高の義人ヨブを“実験材料”にして、「人間は、なんの見返りもないのに（それどころかあらゆる厄災が我が身に及んでも）純粋に神を信じることができるか」という根源的な問題提起を提出し、作品全体を通じて解答を与えんとするものであると言ってもいいだろう。

そして、その「解答」は、非常に消化不良・不全感の残る形で、読者が投げ出される形になっている。なぜならば、その「解答」前編ともいえる三友人及び仲介者の「説教」は、ヨブによって反発されるか、無視されるかで完全に失敗しているし、最後に登場した神は、「なぜ、私が罪なくして、このような悲惨な目に合わねばならないのか」というヨブの必死の訴えに対して、直接的で納得のいく解答を何一つ与えないどころか、天地創造の仕事に何一つ関与していないお前が、何ゆえに神の業に対して異議申し立てをするのかと、圧倒的な神威（神と人間との格差）を示すことで、その解答を求める気持ちそのものを粉碎してしまうからである。

ゆえに、ヨブ記に自分の苦悩を重ねるような読者も、聖典として読む場合には、「罪なくしてなぜこのような悲惨が自分に臨むのか」という問いを発したとしても、その明示的な解答は与えられず、ただ神への絶対服従を要求されるのみである。「無解答の解答」といえば禅語めくが、いわば、そうした絶対服従、従順な姿勢を取ることが暗示的な「解答」になっているであろう。

確かに、聖書には、人間の賢しらな知を捨てて、神に従順に帰依し、素直に信仰の門をくぐったときに、初めて真実の救いが与えられ、幸福になるという教えが随所にみられる<sup>7</sup>。これをあくまで人間と世界の永遠の真理を知力の限りを尽くして理性的に探究するギリシャ哲学の精神（ヘレニズム）に対して、創造主（神）と被造物（人）とは絶対的に隔絶したものであり、人間は、結局のところ神慮を知ることは絶対にできず、最後は啓示に従うしかないというユダヤ・キリスト教（ヘブライズム）における信仰の絶対優位の立場と言ってもいいだろう。

ただ、そうしたギリシャ以来の哲学精神のみならず、広く近代的な自我を備えた現代人からみても、やはりヨブ記の「回答」には素直に納得できない人は多いだろう。このヨブ

<sup>7</sup> たとえば、創世記の善悪を犯す知恵の果実を禁じるくだり（『創世記』第三1—7）、「知識が多ければ悩みを多く、知識を増すものは悩みも増す」（『伝道の書』第1章18）、「人は、神のはじめから終わりまでなされる業を知り尽くすことはできない」（同書、第3章11）、「知識は人を誇らせるが、愛は徳を立てる」（『コリント人への手紙』第8章1）、「むなしい虚偽の哲学で人の虜にされないように気をつけよ」（『コロサイ人への手紙』第2章8）など

記における神・人関係を通常の親子関係になぞらえていけば、親が子供に罪なくして理不尽な罰を与えたとして、子供がそれに涙ながらに抗議し、自分の無実を訴えて、親にその理不尽さの理由説明を求めた際に、「(親と子は立場が違うのだから) 口答えするんじゃないです。黙って従いなさい」と頭ごなしに叱ったとしても、容易に納得する子はそうそういないだろう。むしろそこで押し黙る子は、現代の心理学的に立場で言っても、「いい子」ではなく、後年、健全な自己愛を損なわれた神経症患者になってしまいかねない。

ユングの『ヨブへの答え』は、まさにそうした心理学的な立場から、ヤハウェの神を公然と批判し、いわば“口答え”をしている。ユングによれば、この神は、ヨブを問答無用でしかりつける時には、暴力的、非道徳の立場に立っており、倫理性においては、ヨブは神よりも上に立っているというのである<sup>8</sup>。

無論、信仰者が神に絶対服従するのは、高次の宗教的境地において成り立つ論理だから、神と人間の関係は、単純に親子の関係と同日の談ではないという異論もあるだろう。ただ、その場合であっても、信仰あるものが、過酷な運命に翻弄されるときに、その是非を自分なりに納得していなければ、ヨブのごとく神に対して理不尽さを訴えることはしなくても、少なくとも「自分は、神に愛されていないのではないか」と己の運命をかこち、呪ってしまわないだろうか。これもある意味では、ユダヤ教・キリスト教の人間の自然な知的探求を過度に抑圧する原罪思想の病理的な側面であるという指摘もできるだろう。

いずれにしても、近代的な知性理性の立場に立っても、特殊宗教的な立場に立っても、ヨブに対する神の側からの応答には、きわめて不明にして未完結な感じが残る。その問題提起の人類共通の根源性に比して、その解答の「不全感」ゆえに、ヨブ記そのものが宗教内外の数限りない論客を触発し、いわば追い立てるようにして常に新しい解釈の地平を開き続けていると言えるだろう。

もっとも言えば、人間の沈黙を命ずるヨブ記の結論こそが、それを読むものに黙ってられない衝動を喚起し、「なぜ」という問いを生み、さらなる真理探究の旅に突き動かさざるをえないのではないだろうか。

#### 4 ヨブ記の基本設定とプラトン『国家』の問題提起との比較考量

以上見てきたように、ヨブ記の問題設定は、ユダヤ民族固有の宗教的な問題意識にとどまらず、すべての信仰ある者にとって不可避の課題であるのみならず、特定の宗教をも超えて、全人類に投げかけられた普遍的、根源的な問いであると言ってもいいだろう。

この問題設定のこうした普遍性をより明瞭にするために、以下にプラトン『国家』第二巻冒頭のソクラテスに対して弟子グラウコンによって投げかけられた問題提起を取り上げ、ヨブ記の問いと比較考量してみることにする。

『国家』第一巻において、ソフィスト・トラシュマコスによる「正義とは、強者の利益である」、「不正を犯すものは、正義をなすものよりも得になる」という断定的な主張に対

<sup>8</sup> ユング『ヨブへの答え』(みすず書房、1988年) 参照

して、伝家の宝刀である問答法の手法を駆使して、完膚なきまで論破する。ソクラテス論法のすごいところは、自らは断定的な主張は一切控え、周到に質問を投げかけることによって、その議論の責任を 100 パーセント自らの論敵に帰することである。そのことで、相手が当初主張していたこととまったく逆の意見、トラシュマコスの場合には、「正義は、弱者の利益であり、不正を犯すものは、正義の人よりもみじめな敗北者であり、不幸である」という結論に至るのを聞くと、この議論の行方を見守る周囲の見物人たち、そして後世のプラトン作品の読者も、ソクラテスの論法の鮮やかすぎる切れ味に驚嘆するのである。

ソクラテスの論法は、問答による概念分析を駆使することで、相手の言論に内在する論理的矛盾を明るみに出し、相手自らに敗北を認めさせるという手続きを取るのです。お互いの意見が並行性をたどるといった不毛感が一切なく、まるでよくできた魔術を見るがとくに鮮やかで、強力無比なのである。

そうであるがゆえに、本来であれば、『国家』の議論はここで完結するはずであったが、そこに敢然と立ち上がったのが、ソクラテスの愛弟子グラウコンとアダメントスである（アダメントスの議論は、グラウコンの議論を補強した立場であるので、ここではグラウコンのみを扱うことにする）。

ソクラテスが議論の勝利の余韻に浸る間もなく、グラウコンは、「ソクラテスよ、私たちが説得した気になれば、それで気がすむのですか」と詰め寄る。まるで、ソクラテス自身が、彼が論破してきた詭弁家たちの立場、真実の説得よりも相手のそう思わせることをよしとする立場に立っているとはいかねない口吻である。

それに対して、哲学者ソクラテスは、もちろん、「説得」の見かけでは満足せずに、「実際に説得した」ことをもってよしとする。それを受けて、グラウコンは、次のような意見を提示する。自分は本心ではそれに組してはいないけれども、あえて真理の探究のために思考実験風にトラシュマコスの議論をさらに展開して、「世の常の人は、決して正義そのものを信奉しているのではなく、正義そのものはつらいものであり、名誉その他の自己利益が見込まれるからこそ、人はしぶしぶ正義を実行するのであって、そうした利得が一切なくてもあえて正義をなす人はいないだろう」と問題提起をなすのである。

これは、その意味内容のみならず、文脈的なニュアンスまで含めて、先述したヨブ記の序曲における神に対するサタンの問題提起と酷似している。神が、「ヨブほどの義人はいない」と満足気に言ったのに対してその敵対者は、「なんの報いもなく神を畏れたりするものですか」と不敵な挑戦をするのだ。この「神を畏れる」を「義をなす」と言い換えてもほぼ同じ意味であろう。古代ユダヤでは、この義人とは、単に正義の人を指すのみならず、宗教的な心情、神を畏れる気持ちを持っている人を意味したからである<sup>9</sup>。

また、グラウコンは、「人が、本当にその結果ではなく、正義をそのものを求めて正義をなすか」ということを吟味、すなわち正義を純化するために次のような思考実験をする。

---

<sup>9</sup> 「旧約で正しいもしくは義は、必ずしも道徳的な意味ばかりではなく、宗教的、信仰的な意味もある。例えば、アブラハムが義人と呼ばれるのも彼自身の義をいうのではなく、彼が神を義とした、神を全的に信頼したことを指しているのだから、それにより彼の義が神に認められているのである。」（『ヨブ記』p.16、浅野順一著、岩波書店）

「不正の人には、完全な不正を与えて、そこから何一つ差し引かない」(361a),つまり、不正をなしてもそのことで絶対に罰せられたり、損な目にあわない人を想定し、完全に正しい人もそこから一切の不純なもの、名誉や利得を取り除いて、ただ、正義だけを残すという思考実験を提案する。なぜならば、いくら正義の人であるといっても、現実には様々な名誉や褒美などのこの世的な利得に恵まれていたならば、「彼が正しい人であるのは、<正義>そのもののためなのか、それともそういった褒美や名誉のためなのか、はっきりしなくなる」(361C)からである。

すなわち、これはヨブ記の中で、神がサタンからの挑戦に応えるために、完全な義人ヨブを被験者にして、「これ以上ない過酷な試練のさ中で信仰を保っていられるか」という実験をなしたと驚くほど軌を一にしている。その意図が、正確に同じ意味合いをもっていることは自明であろう。

なぜならば、ヨブがどんなに義人であると言われても、実際の彼は、神よりあらゆるこの世的な恩恵を受けているのだから、彼が義をなすのは、純粋に義のため、もしくは神のためなのか、それともその恩賞のためにしているのか定かではないからである。「あなたが彼と彼の家と彼の持ち物のまわりに垣をめぐらしておられるのです。彼の手の業をあなたが祝福され、彼の家畜は地に増えています。」(1章10)これは、上述のグラウコンの問題提起と寸分たがわない。

ここまで論じてみれば、次の結論も明らかであろう。ヨブ記におけるヨブのあらゆる悲惨は、神の悪意でもなければ、ヨブを滅ぼさんとするサタンの巧妙な詐術が神に対して功を奏したからでもなく、純粋に真実の義が単なるきれいごとでもなく、単に天上界の理念としてではなく、この地上においても現実によりうること、すなわち信仰と義の真実性を実証するためである<sup>10</sup>。

すなわち、グラウコンが果敢に提起した問題、すなわち、「人は、純粋に正義のためだけに正義をなしうるか」、言い換えると、「そのことによって何の利得がなくても、たとえ自分が悲惨な目にあっても、純粋に神を恐れ、信じることができるか」という問いに対して、ヨブ記では、神がヨブをその思考実験のモルモット役に任じたのである。前述したとおり、ヨブ記全体がその問題提起に対する声なき“解答”である。

それは、決して特殊ユダヤ教的、旧約聖書的な磁場から生じた問いではなく、全く文明圏を異にするプラトン哲学と同一の問題意識を共有できるような、人類普遍の問題設定であるので<sup>11</sup>、その解答もまた特殊ユダヤ・キリスト教文明の圏内において通用するのみなら

<sup>10</sup> この論点さえ外さなければ、ユングのいうようにヨブ記における神が、暴力的で非倫理的な存在であると決めつけることはできないだろう。

<sup>11</sup> ロバート・ゴルドイスは、ヨブ記と『国家』のそうした同一性に着目しつつも、次のように述べている。「しかし、体質や方法において、そのうえ表現の様式や到達した結論において、なんと異なる世界であろうか！ヨブにおいて作者は正義と邪悪の本質の分析をどこにも試みていない。ギリシャの哲学者が論理において発見しようとしたことを、ヒブルの詩人は、直観的に把握したのである。」(『神と人間の書—ヨブ記の研究—(上)』、教文館、1977、p.50)。両者の違いは、要するに問題設定のそれではなく、その表現方法や結論の違いだと言っているわけである。ただ、ヘブライズムとヘレニズムとまさに対称的は文化伝統に根ざしながらも、その問題意識は、寸毫も異ならないということは、特筆すべき重要事項ではないだろうか。なぜならば、旧約ヨブ記における問題設定が、人類普遍の共通の基盤から生じてきているものだと

ず、地球人類すべてに通じる普遍妥当的な意義を有しているのである。

これをもってサタンとの賭けに神が勝利したか、それともサタンの思う壺になったかは、今のところは未決定にしておき、本稿の議論が成熟してきた段階で初めてその価値判断に踏み込みたい<sup>12</sup>。

## 5 ヨブ記の展開における論点

### 5.1 「ヨブの嘆き」の場面設定の現代的意義

上述のとおりヨブ記の問題設定そのものが人類普遍の意義を有するならば、神がサタンの挑発に乗じて、ヨブの運命にもたらした厄災は、人間の視点からすれば、どんなに悲惨なものであり、理不尽極まりのないものに見えたとしても、神の視点からすれば、そこには大いなる神意において、人類最高の模範的義人<sup>13</sup>ヨブへの絶大なる信頼と期待が寄せられていたとみることは理にかなっているだろう。

サタンの挑発の意図は、一人ヨブという人物の信仰心や志操を厳しい試験にかけてその正体を暴くということにあるのではなく、人間性そのものの尊厳を貶めることにある。どんなに義人に見える人であっても、その本心においては、純粹に正義のために行動する人は皆無で、その裏には利己的な動機が隠されているという凡俗的な人間観を実証したかったのである。

その挑戦に対して神の側は、人間性への希望を表明するために、自らの秘蔵子ヨブを人類の代表選手として選んだのである。それは新約聖書において神が“その一人子”であるイエス・キリストを地上に送り出して、人類の罪をあがなうためにもっとも悲惨な運命を体験せしめたのと根本においては違いはないだろう。そのために内村鑑三が指摘する通り、このヨブ記を旧約聖書において新約聖書のイエスを先行的に予示するものとみなす解釈も成り立つのである<sup>14</sup>

問題は、イエスと違って、我々が人類代表者ヨブは、こうした神の側から自らに与えられた“特命”（特殊任務）に対してまったく無自覚であったことである。こうした無自覚性は、先述したヨブ記の問題設定の本質からすれば当然の帰結である。

---

するならば、文化伝統を異にする私たち現人にとっても、その意義は抜き差しならない現実性を帯びて迫ってくるからである。

<sup>12</sup> すくなくとも表面的には、ヨブは、全財産と息子と息女を失っても、神への畏れを忘れなかったが、いざ自分の肉体が恐ろしい皮膚病に責め苛まれたときには、神への疑が生じ反抗的な態度をとってしまったので、サタンの挑戦に敗れたようにも見えるが、最後に神の顕現とともに、一切の抗弁の口を閉じて、心から改悛と神への従順な帰依の姿勢を示したので、解釈次第で、どちらともとれるからである。この問題の最終的決着は、「ヨブ記の現代的意義—新弁神論への試論として—(2)問題解決編」にて扱う予定。

<sup>13</sup> ヨブがその当時における人類最高峰の義人であるという想定は、本稿にいう問題設定から必然的に引き出される帰結である。もしも、ヨブよりも人格や信仰心において勝る義人があれば、神やその人物をこのような試みに合わせたことは間違いないからである。

<sup>14</sup> 内村鑑三は、ヨブ記全編を通じてイエス・キリストの前身、さきがけを読み込もうとしている。「ヨブ記一卷四十二章要するにこれキリスト降世以前のキリスト探究史である。」前掲書 p.35

なぜなら、もしもヨブが、天上界における神とサタンとの対話を知らされていれば、彼の苦悩そのものに意義が生じ、はるかに耐えやすいものとなり、「すべての報いが奪われた過酷な運命のさ中にあっても神を畏れ、純粋な信仰を把持できる人がいるか」というこの実験の当初の意図が崩れてしまうからである。

しかし、このヨブの無自覚性こそが、人生においていわれなき悲惨と苦難でもがいている多くの善男善女たちにとって深い共感を呼ぶ所以になっているのではないか。もしも、ヨブがイエスのごとく自分の苦難の意義を神の立場から自覚しているのであれば、偉大な模範として最高の崇敬の的にはなるだろうが、そこに自分たちの似姿を感じて、限りない慰安と励ましを得ることは決してなかつたろう。

そこにこそヨブ記作者の人類史上稀有の文学的な天分が輝いているのである。ユダヤ教ラビのクシュナーによると<sup>15</sup>、当時人口に膾炙していた、ヨブ記のもとになった民話における「ヨブ物語」の筋書きでは、ヨブは、生身の人間としてはありえないほど現実離れした模範的な信仰者として描かれていたという。

冒頭の序曲に当たる神とサタンとのやり取りとその結果によるヨブのこれ以上ない悲惨な運命といった基本設定は、旧約のヨブ記と同じだが、民話ではその後の展開は相当に違っている。見舞いに訪ねてきた三友は、ヨブの妻と同じように、「この惨状が神への報いならそんな信仰は捨ててしまえ」と詰め寄るのに対して、ヨブの信仰心は微動だにせず、何が起ころうと神への信仰を捨てることはなかつた。

最後の結末は、ヨブ記の終局と同じであり、全知全能の神が現れて、流神的な助言を与えた三友を厳しく叱り飛ばし、その信仰の強さゆえにヨブには山のような褒美を与え、以前よりもはるかに素晴らしい新しい家財や子女を授けるのである。

「いかなる苦難においても神への信仰を失わなければ、最後には必ず何倍にも報われる」というこの筋書から、「原ヨブ」物語が民衆教化を狙った、ステレオタイプの教訓的説話であることは容易に見て取れるだろう。シェークスピアの登場する前の単純な勧善懲悪的なキリスト教劇と同質である。

こうした宗教説話にもそれなりに民衆の宗教的な情操を涵養する効用があったことは否定しえないが、あまりにも理想化された信仰者を見せられた民衆は、その場限りの宗教的高揚は覚えても、内心では、「現実にはこんな理想的な人物はいるはずがないではないか」とかえって興ざめしてしまいかねないだろう。

とりわけ本当に苦悩のどん底でもがいている人にとっては、まったく慰めにもならないどころか、ただでさえ苦しいのに理想的なヨブ像に引き比べられて己のみじめさを見せつけられるようで、かえって苦しみは倍加し、神経を逆なでされるように感じてしまうのではないか。まさに逆効果なのである。

それに対してヨブ記では、序曲と終局の枠組みはそのまま踏襲しつつも、その本体部分でのストーリーは抜本的に書き換えられる。自分の全財産と子女全員を奪われても気丈にふるまい、神への信仰を失わなかつたヨブも全身に疥癬ができ、身体的な苦痛の絶頂にあ

<sup>15</sup> H.S クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか 現代のヨブ記』(H.S クシュナー、岩波現代文庫、2008年) p.46—p.48

って、ついには、彼を見舞いに来た三友の前で悲痛な絶望と怨嗟の叫びをあげるのである、

滅びよ、わたしが生まれた日、  
男の子がはらまれたといったその夜  
上なる神その日を忘れ  
光そのうえに照るな (第3章3)

篤実な信仰者であったヨブは、これ以上ない苦難のさ中にあっても自殺をすることも神を呪うこともできないので、自らの生誕の歴史的事実そのものを呪い、自らの魂そのものを歴史から抹消してしまいたいと願っているのである。悲痛極まりない魂の絶叫である。実際、人は、本当に耐えがたい苦しみの中にあるときに、神に自らの存在そのものを消してほしいと願わずにはいられなくなるものではないだろうか。

## 5.2 三友の説教と無理解によるヨブの葛藤

ヨブ記作者による天才的な書き換えは、さらにヨブを見舞う三友のキャラクターの性格設定における重要な変更にあつた。民話伝承においては、この友たちは、ヨブ記の妻のごとく、「完全なる義人であるヨブに因果応報の理法からいってあまりにも不当な罰を与える神であれば、信仰を捨ててしまえ」と唆すのだが、ヨブ記における三友は、むしろそのような応報思想にかたくなまで信奉して信仰揺らぐヨブを徹底的に責め苛むからである。

天性の文学的資質をもつヨブ記の無名作者は、前述の民話における苦悩に呻吟する人間の情味を介さない紋切り型の説教調に抵抗を覚えたのであろう、そうした硬直した教条主義者の権化としてエリパズ、ビルダデ、ゾパルの三人を配剤しているのである。そのような卓抜な人物造形を通じて、ヨブ記作者の耐え難い苦悩の渦中にある者への熱い共感を提示し、宗教者にありがちな偽善性・教条主義を痛烈に風刺する意図があつたのではないだろうか。この作者は、よほど人情の機微に通じた人生通であつたと推察される<sup>16</sup>。

この三友もはじめから“上から目線”で情け容赦なく“お説教”をしたのではない。遠路はるばる苦境にあるヨブを訪ねてきた彼らは、ヨブのあまりに変わり果てた姿を見て、「声をあげて泣き、それぞれ着物を裂いて、塵をその頭の上で天に向かってまき散らした。彼らは、七日七夜ヨブと一緒に地に座っていたが、一人も一言も彼に話かける人はいなかった。」(第2章11-12)

ただ、彼らもヨブの姿を見、その篤実の信仰者とも思えぬ自暴自棄の激情を耳にして、生来の説教癖が噴出したのだらう。彼らが固く信じて疑わない因果応報の摂理に照らして、篤信の人と思われていたヨブは、実は人知れないところで神意にもとる大罪を犯してしまったと妄信してしまったのである。手に負えないのは、凝り固まった自称“正義の人”である。なまじ自分の行為が絶対の正義と確信しているから、一切相手の言い分を聞く耳を

<sup>16</sup> 「たぶんこの作者は、大いなる人生の経験に通じて、大なる天才であつたことが察せられます」(『内村鑑三聖書注解全集 第四巻』、教文館、1961年) p.17

持たない。

まずは、世ずれした年長者のエリパズが、お説教の先陣を切る。今まで模範的な信仰者として「多くの人を教え、弱りはてた人を強くしてきた。君の言葉は躓く者を立たせた。よろめく膝をしっかりさせた。ところが今事が君に及ぶとそんなに狼狽するのか。君は神を畏れることを支えとし、君の全き歩みは君の希望だったのではないか」(第4章2-6)

これは、説教者の常套句である。おそらくはヨブは、苦難にあった人が、安易に嘆きの声を上げたときに、「神意は、人間心には計り知れない。不平不満を言うのではなく、神を信じ、なぜ自分がそういう目にあっただのかよくよく考えてみなさい」と説教していた姿をエリパズはよく知っているのだろう。相手の説教者としての普段の言動を挙げて、今の墮落した彼の姿を、その言行不一致を痛烈に非難しているのである。「普段お前さんが偉そうに説教していた内容と反することをしているではないか」と。

このように言われた方は、たまらない。退路を断たれ、一切の言い訳も封じられ、まさにジレンマ地獄に墮ちるしかない。もしも彼が自説を撤回しなければ、自らの姿を自身で断罪することになるし、かといって今の自分を防衛すれば、かつての自説を撤回することを強いられるからだ。いずれにせよ、誇り高い信仰者にとって耐えられるものではない。

さらに、エリパズは、ダメージを受けたヨブに返す刀で追い打ちをかける。まるで傷口に塩を塗るような心なき所業である。

考えてもご覧。誰が罪なくして滅びたか、  
正しい者で滅ぼされた者がどこにある。  
わたしの見るところでは、不法を耕す者、  
邪悪を蒔くものはその実を刈りとる。(第4章7-8)

見よ、神のこらしめる人は幸いだ。  
君は全能者の咎めを退けてはならない。(第5章17)

ヨブに因果応報の理法を説き、改心を迫るのである。友人としての情誼があるから、直接ヨブを名指して罪人扱いするわけではないが、これは事実上、相手を悪人呼ばわりしたのも同然である。

無論、自分を完全無欠の信仰者とまでは思わぬものの、ヨブには全く身に覚えのない科であからさまに責められたものだから、納得するはずもなく、反省懺悔など絶対に強制されたくないと反発心が募り、むしろ友人面して自らを無実の罪で断罪する説教者の無慈悲な非道に、深く傷つき、取り乱し、腹の底からの憤りを禁じ得なくなるのである。

どうか私の憤慨がよく量られ、  
私の混乱も一緒に秤にかけられるように  
そうすればそれは海の砂よりも重いだろう。  
だから私の言葉があんなに極端であったのだ。(第6章2-3)

ヨブ記の読者ならば、何人と言えども、ヨブの心中察して余りあるだろう。人生において苦難を味わったことがある人であれば、誰しもその苦難を限りなく耐えがたいものにするのは、自分の苦しみを誰にも理解されず、同情もされないことであると知っているだろう。ましてその無理解な断罪者が、もっとも信頼を寄せ、信仰の絆で結ばれた法の友であったとしたら、その救いなさ、絶望の深さたるやいかほどのものであろうか。「友に対して愛を拒む者、その者は全能者を畏れることをやめるのだ」(第6章14)

それは、ちょうど川の流れが途絶えた乾燥期に隊商が、一縷の望みを託して、道を変えて、生命の水を求めていった先にも、水滴一滴とて乾ききった跡を見たときの絶望にも等しいとヨブは言っているのだ(同章15-20)。その期待が大きければなおのこと、それが裏切られたときの絶望も計り知れないものがあるだろう。「君たちもわたしにとってそのようになった」(同章21)

内村鑑三は、ヨブを襲った7つの厄災のうち最後で最悪のものとして、この三友の無慈悲な説教そのものを挙げていますが、その通りであろう<sup>17</sup>。全ての望みを絶たれたヨブにとって一縷の望みは、信仰の友たちの温かい同情のみだったのだ。その最後の希望が見るも無残に打ち砕かれたときに、彼は、人生最大の深淵を垣間見る。一筋の光明とてささないまったき漆黒の闇……。

ヨブ記を虚心坦懐に読む者は、罪なくして最大の苦難を味わいつくした上に最後の望みを託した友人たちにも冷酷無比な仕打ちを受けたヨブに対して深い同情を感じずにはいられないだろうし、その友たちの無慈悲・無理解には強い義憤のようなものを禁じ得ないはずである。そうなると、無実の罪で断罪される哀れな犠牲者ヨブと人情を欠いた冷酷な教条的説法者(「旧約版パリサイ人」といった善玉・悪玉の構図も成り立つだろう。ヨブ記作者の狙いとその点にあったことはまず間違いないだろうし、その天才的な筆遣いの妙技には脱帽するしかない。

ただ、ここで一つ気を付けなければならないことがある。このヨブと友人たちとの悲劇的な対立相克は、決して一方が善で他方が悪といった単純な善悪二元的な構図に収まるものでは決してないということである。民話のヨブ物語における勧善懲悪的な構図を拒否させた天才的な作家によってヨブ記が書かれたらしいことは、すでに述べたとおりである。私たち読者が無意識のうちに想定してしまう三友の“悪意”や無慈悲は、決して彼らの人格や個性に帰せられるものではなく、むしろヨブと彼らの認識格差から必然的に生じる悲劇なのである。

要するに、この三人の友は、本当にヨブを慰めんとして暖かい同情心をもって彼を見舞ったのだが、その姿をみて、因果応報の理法に照らしてヨブが大悪を犯したと腹の底から信じ込んだから、掛け値なしに全くの善意から彼を救わんと心を鬼にして苦言を呈したとみなすことが自然の読みである。

また、天上における神とサタンとのやり取りを知らないという点では、ヨブと彼ら三人

---

<sup>17</sup> 内村鑑三、前掲書 pp.28-9

は全く変わりがない。ヨブとこの友人たちの立場を変えて、彼らの内の一人がヨブと同じ悲惨な運命に見舞われたとしたら、やはりヨブよりも信仰堅固のはずはないので、同様に神への呪詛を吐露しただろうし、ヨブも当時の神学思想である因果応報の信奉者であることは間違いないので、その友人に悔い改めを強要したはずである。

#### とりあえずの結び

以上、ヨブ記の提示する問題：なぜ、道徳的にも正しく、信仰あるものが、罪なくして悲惨な境遇に墮ちるのか、という問いの意味を探究してみた。それは、いたづらに神の人間に対する絶対的な權威の誇示をするためのものではなく、かといって人間の神に対する不羈なる独立宣言の書でもない。

ヨブ記そのものが、神の側からすると、一人の模範的な宗教者を被験者とした、人間の尊厳、純粋な信仰の至徳を明らかにするための実験である。そこには、神から人間に対する圧倒的な信頼と期待が隠されていたと思われる。

と同時にこのヨブの苦悩物語は、人間の視点からすると、品行方正で信仰篤い、完全無欠の善人が罪無くしていわれなき極限的苦境に墮ちた際に「いかに処すべきか」という極限状況における人間実験のドラマである。神の真意を知るよしもない、意味なき苦しみの中であって、ヨブ以上に高潔に己を持することができる人は、まず一人もいないだろう。

いわゆる聖人君主とて、理不尽極まる目にあっても端然自若として己を持し、不運に動ぜず、耐えきることができるのは、あらかじめ神慮を知り、その御心と同通しているので、自らの苦境そのもの天意、大いなる意義を感じることができるからである。また、そこまでの悟りに到っていないくても、不治の病などの苦悩に呻吟する自分の気持ちに寄り添う暖かい家族や友の親身なる共感や慰めあれば、その方のためにも耐えきる勇気を鼓舞されることだろう。

ヨブの置かれた状況は、遥かに厳しく、そうした親身の慰め手とてなく、本来であれば最後のよりどころになるはずの神すらも、ゆえなく自分を冷酷無比に処罰する恐ろしき裁き手のように見えただろう。人間ヨブの苦悩をやわらげる要素は、みじんもない。まさに人間性のぬくもりが一切ない、極限の闇である。

それゆえ、理解されない苦しみに人知れず、涙を流す人、一切の再生の望みを絶たれた絶望者など、どのような人生の苦境に喘いでいる人であっても、ヨブの姿を見て、他人事ならぬ共感を身に染みて覚えるであろう。ヨブは、苦しめるすべての人の代表者なのである。その人類的な苦悩の代表者ヨブにして、きれいごとならぬ本当の救いが訪れるのであれば、この宇宙に照らされぬ闇など一つもないことになるだろう。一人苦しめる我が身の悲しみに一条の希望の光を感じるのみならず、この全宇宙が大いなる神の慈悲の内にあることを確信して、自他ともなる未来への希望に魂が真実に再生するに違いない。

しかり。ヨブ物語は、その問題解決の結論のみならず、問題設定そのものが、すでにして大いなる共感と希望の福音であったのではないだろうか。

**参考文献**

- 『ライプニッツ著作集 宗教哲学 弁神論 (上) (下)』、工作舎、1990-91  
『国家』、プラトン著、岩波書店、1979  
『ヨブ記』、関根正雄訳、岩波書店、1971  
『ヨブ記講演』、内村鑑三著、岩波書店、2014  
『内村鑑三聖書注解全集 第四巻』、山本泰次郎編、教文館、1961  
『ヨブ記—その今日への意義』、浅野順一著、岩波書店、1968  
『ヨブ記の研究』、浅野順一著、創文社、1962  
『神と人間の書—ヨブ記の研究 (上) (下)』、ロバート・ゴルディス著、船水衛司訳、教文館、1977-1979  
『ヨブへの答え』C.G ユング著、林道義訳、みすず書房、1988  
『なぜ私だけが苦しむのか—現代のヨブ記』、H. S. クシュナー著、斎藤武訳、岩波書店、2008  
『苦難に対する態度—苦難の人ヨブを中心として』、賀川豊彦著、慧文社、2015  
『トマス・アキナス『ヨブ記註解』』、保井亮人訳、知泉書房、2016